学校緑化と体験学習

―― よく働く子を育てる活動 ――

足利市立大橋小学校

1　はじめに

「私たちの後ろには道はない。私たちの前にも道はない。今日から子どもと教職員の知恵を結集して一筋一筋の道を開拓していかなければならない。」これが昭和５５年４月８日の開校式における学校長のあいさつであった。「みんなで創る大橋小学校」の合い言葉はここから生まれた。

開校して２週間後には約７００本に及ぶ樹木を県緑化推進協会よりいただき，ただちに子どもと教師の作業によって植樹した。校庭の整地作業も子ども全員と教師で毎日拾い集めたりで約２ヶ月かかった。その量はなんとトラック（２トン車）３台分もあった。

校章は４月中に全校の子どもたちから募集して，４年生のＡ君のデザインを採用して制定した。校歌も本校のＴ教諭の作詩したものである。そしてやがて迎える５周年記念行事で，「大橋小よい子の像」を建立するために，５６年度から児童会が先頭になって毎月１人１０円の募金活動を行っている。この像のデザインも全校の子どもたちから募集することにしている。

このように本校は，子どもたちにできることは，最大限子どもたちの手でやらせる。また子どもたちだけではできないことは教職員でやることをモットーにして学校創りをして来た。現在まで，父母の労力奉仕や金銭的な寄付はほとんどいただいていない。

いま，植樹した時５０センチメートル足らずのネムの木が２メートル５０センチメートルに成長している。市内４校から集まって来た６００人の子どもたちは，身も心も大橋小学校の子どもになった。ここまで来て初めて学校創りの苦労が喜びに転化された。

本校は開校以来「心の豊かな子，たくましい子，よく働く子，自ら学ぶ子」を育成するために，教職員の組織力と創意を大切にして来た。「よく働く子」を育成する教育活動を推進するプロジェクトチームがそのひとつである。

私たちは６年間を１サイクルとして着実な学校創りをしていこうと考えている。本年度で３年目が終わるちょうど中間点にある。この時点で反省の意味を含めて，実践して来た事項をまとめてみようと言うことになった。

(1)　大橋小学校の教育目標　（望ましい子ども像）

ア．心身が健康でたくましい子

イ．心が豊かであたたかみのある子

ウ．よく考えほん気で勉強する子

エ．きまりを守り仲良く協力する子

オ．責任を重んじ心をこめて働く子

(2) 望ましい大橋小学校像

ア．美しく整ったおちつきのある学校

- 子どもたちがおちついて学習と生活のできる学級
- 子どもたちが四季おりおりの変化を感じとる樹木がある
- 子どもたちが四季おりおりの草花を育て，風情のある
- 清潔感のあふれる

イ．はつらつとして，活気に満ちた学校

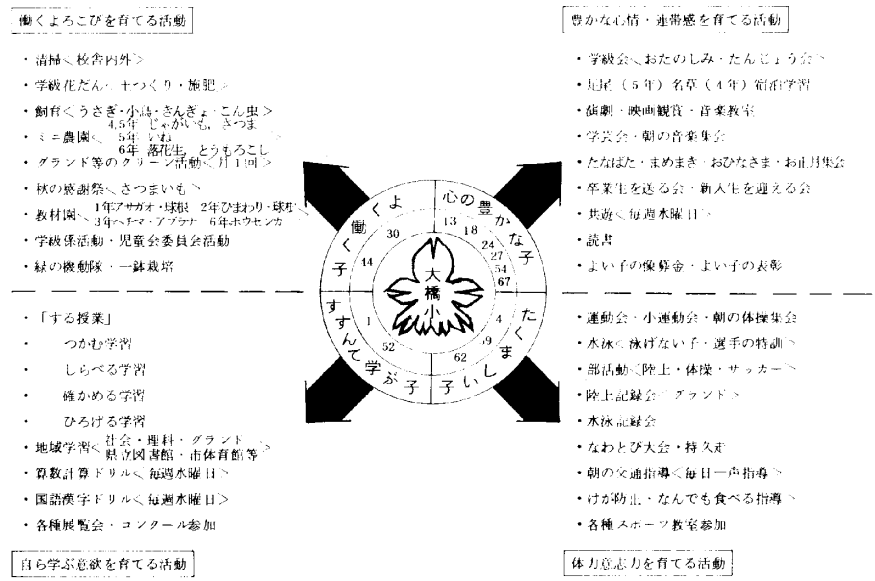
- ひとりひとりが，全力を出しきって学習する。
- その場に応じた，自由さと規律をわきまえた小さな紳士
- みんなと遊んだり運動したりして野性味を発さんできる
- いそいそと働く

ウ．エ．オ．　略

(3) 望ましい子ども像具現の場　　大橋小子どもと教師が共に学ぶ四活動（数字は市教育目標）

望ましい子ども像，学校像を具現するために左の図を作った。

これは本校の教師が毎日指導している授業や学校行事などが教育目標のどの項目に関連しているかを，ひと目で知るためである。



2　勤労体験学習を推進するにあたって

(1) 教育課程との関連

小学校教育課程編成の基本方針に「正しい勤労観を育成する」とある。この勤労観は教科，道徳，特別活動の三領域を通して，子どもたちに身につけなければならない。これはどちらかというと，働くことについての知識，判断，観念，意義，価値についての学習が中心になりがちである。ともすると経験や体験や実践性が乏しくなってしまう。

本校では三領域の教育活動を充実するだけでなく，さらに深化，拡充をはかり，頭だけでなく

体を通して実践することによって子どもたちに「ほんものの勤労観を育てていきたい。勤労体験学習ということで，慢然と子どもたちに働くことの体験をさせればよいというものでもない。

本校では二つの重点化をはかっている。そのひとつは理科，社会科，家庭科の発展として，調査，観察，実験，飼育栽培などであり，ひとつは「みんなで創る大橋小」の合い言葉による特別活動の学級会活動，児童会の集会活動，委員会活動，クラブ活動などである。

(2) 大橋小創りとの関連

物理的な金銭，物，時間が不足していると人間だれもがそれを充足し満足させようとする意欲が湧いて，いろいろな行動を起す。本校は新設校であるために校舎こそ新しいが，時間的にも，空間的にも充足感は全く乏しい状態にあった。そのためか子どもも教職員も先進校に追いつけ，追い越せのフロンテア精神が旺盛であった。このエネルギーを発揮するには体験学習が最も適切であると考えた。子どもたちや教職員にとって体験学習ほど目標が明確なものはない。またそこには活動の成果が歴然と現れてくるからである。

さらにこの実践から，体験学習のねらいを超えた級風づくり，校風づくりにも役立てることができると考えた。

(3) 本校勤労体験学習の体系づくり

前述のような考え方に立って勤労体験学習を3年間推進して来た。初年度は試行の段階であったが，第2年次からは大橋小学校の子どもにできる，教職員でできる勤労体験学習を研究してその体系化をはかることにした。

一般的にいって学校教育は時代の先取りには敏感であるが積み重ねには極めて乏しい。したがって校長が変わったり，教職員の転出があるといつの間にか火が消えたようになくなってしまっている。このような繰り返えしでは教育の前進はあり得ない。それにもましてその学校に学ぶ子どもたちにとってこんな迷惑なことはない。

本校ではこのような欠陥を是正する意味において，勤労体験学習の体系づくりをはかることにした。教職員はだれでも，いつでもこの体系を見れば自信を持って子どもの指導ができる。また子どもたちは，この体系に沿って6年間勤労体験学習をすることができる。このようにしてはじめて正しい勤労観も，実践力も育つのではないかと考えた。

3 草創期の緑化基本構想

本校は周囲に市民会館，県立図書館，研修センター，福祉センター，市民体育館，総合運動場などの公共施設がある。草創期の緑化基本構想は二つの視点から検討を加えた。そのひとつは，これらの公共施設とのバランスの上に立って構想をねった。さらに学校の緑化構想の基本である子どもの教育環境の整備の面から考えた。つまり子どもの教育活動に教材として直接活用できること，情操教育に役立てることである。

なおこの構想を推進させるために，「みんなで創る大橋小」の実践化をめざして子どもに勤労体

験学習をさせることにした。「お手植えの木」をよく見かけるが，本校の緑化はすべて子どもと教師の手によって植えることにした。

この基本構想が実現する５０年後には，成長した大樹が，本校に学んだ子どもたちに対して"価千金"の思い出を語りかけてくれることを確信している。

(1) 子どもに四季の変化を実感としてとらえさせる。

日本の美「春は花，夏ホトトギス，秋は月，冬は雪さえて涼しかりけり。」とノーベル文学者川端康成氏は講演した。日本人は古来より四季の変化に対応した風俗，習慣，行事を持って来た。学校教育活動においても四季の変化に合わせた行事が数多く行われている。

科学技術の進歩により日本人の生活様式は急激な変革をきたした。そのために自然の美しさや厳しさを忘れ去ろうとしている。学校教育の面においても再考する必要に迫られていないだろうか。

本校ではこのような視点から，子どもたちに四季の変化を実感としてとらえさせるために，下記のような樹木を選定して調和のある植樹計画を立てた。

ア．春……サクラ，ツツジ，サツキ，ハナミズキ，ドウダン

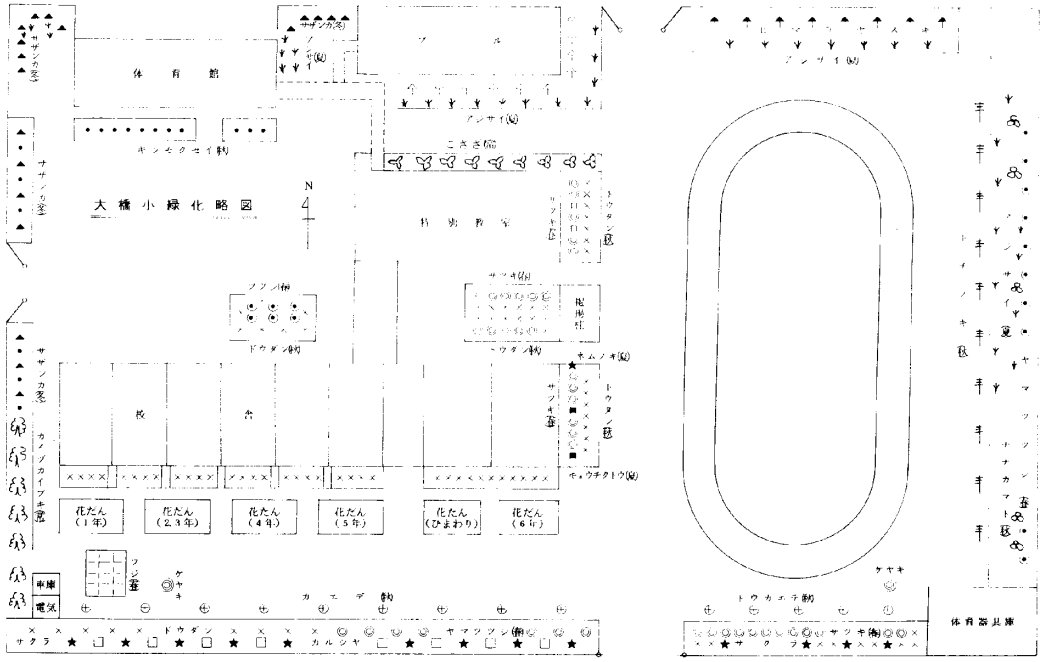
イ．夏……アジサイ，キョウチクトウ，ネム，ナツツバキ

ウ．秋……モクセイ，ナナカマド，トウカエデ，イチョウ，ケヤキ，トチ，プラタナス

エ．冬……ツバキ，サザンカ，ナンテン

オ．常緑樹……ヒマラヤ杉，キンヒバ，オウゴンコノテ，ニオイヒバ，カイヅカイブキ，カシ

大橋小緑化基本構想図



(2) 勤労体験学習に必要な条件の整備

ア．団地の確保

- 学年，学級花壇の面積約３５０平方メートル……校舎前
- 学校花壇の面積約３００平方メートル……校庭，校舎周辺
- ミニ農園の面積約４００平方メートル……民有地借り受け
- その他の耕地約２１０平方メートル……空地

イ．用具の整備

市街地域の子どもは作業ができないと思っていたが，そのような心配はなくなった。必要な道具を与えればよろこんで仕事をするものである。勤労体験学習の条件のひとつとして用具の整備こそ重要な要素である。本校では開校と同時に一輪車１０台，草取りガマ５０丁，移植ゴテ１００丁，スコップ２０丁，自作のカン（ミルクのあきかん）４５０個整備した。これは１学年単位でしかも短時間に能率的な学習をするためである。

(3) 勤労体験学習の時間の設定

本校は学校裁量の時間を「大橋の時間」として週時程に組んでいる。４年生は週１時間，５年，６年生は各２時間あてている。この時間を必要に応じて勤労体験学習にあてることになっている。

なお１年，２年，３年生については教科の時間，または発展学習として適時あてるようにしている。全校的な活動として実施する場合には学校行事，集会活動の時間に実施する。

(4) 勤労体験学習の内容（体　系）

内容＼学年	１年	２年	３年	４年	５年	６年	岡クラス	ひまわり	機動隊
アサガオ	○								
ヒマワリ		○							
アブラナ		○	○						
ヘチマ			○						
ジャガイモ				○			○	○	
サツマイモ					○		○	○	
イネ					○				
ホウセンカ						○			
落花生						○			
球根（チューリップ等）	○	○							
一鉢栽培		○	○						○
学年花だん	○	○	○	○	○	○	○	○	○
学級花だん				○	○	○	○		○
クリーン活動	○	○	○	○	○	○	○	○	

本校の勤労体験学習の内容を前記の表の通り系統化した。学校の教育活動は意図的，計画的，継続的に行われるものでなければならない。特定の教師だけとか，特定のクラスだけで実施することはそれなりに意義は認めるが，その学校の教育力にまで発展しない。

学習内容が系統化されていれば本校に学ぶ子どもたちは，6年間でこのような体験学習をすることができる。子どもたちは「4年生になるとジャガイモがたべられる。」「5年生になるとサツマイモがつくれる。」と新しい学年への夢と期待感が湧いて来るようになる。そこに勤労に対する意欲と喜びがある。また教師の指導面においてもこのような体系が明確にできていることによって学年の内容ばかりでなく学校全体の見とおしもできて，指導に自信が持てる。

(5) 勤労体験学習の指導上の配慮事項

ア．明確な目標と計画

教師が指導する目標をおさえておかないと，ただ体験させるだけで終わってしまう。本校では大橋小の望ましい子ども像の「よく働く子を育てる」ことが大目標である。つぎに望ましい大橋小学校像をおさえておかなければならない。さらに具体的学習面では，教科，道徳，特別活動の指導のねらいとの関連を考えておくことである。たとえば1年生のアサガオ栽培の場合は理科としてのねらいを達成するためと，学級活動としてのねらいをふまえておかなければならない。

5年，6年生のクリーン活動の場合には児童活動としての自主性，協力性とか，道徳の実践力を高めていく指導の場として考えている。

イ．適時性と継続性

動植物の飼育栽培は適時性が最も重要である。指導する教師がこの適時性を研究しておかないと学習活動は意味がなくなる。たとえば2年生のヒマワリの種をまく時期，移植の時期，施肥の時期などである。

また継続性はさらに大切である。“まきっぱなし”“植えっぱなし”よくあることである。これは子どもに責任があるわけではない。むしろ指導する教師の配慮が問題である。これでは子どもに継続的に観察する力や，世話をする愛情も，協力性も培うことができない。

ウ．子どもができること，教師がやること

子どもに最大限やらせることが本校の考えであるがそれには限界がある。低学年の学級園の土の堀り起しなどは労力的にも安全性の面からしても無理である。この学年でできるのは，たねまき，球根の植え付け，水くれ，簡単な除草程度である。これらのことでも日常の教師の助言や体を通しての指導がなければ長続きはしない。教科の充実した指導は準備が大切である。勤労体験学習の指導においては特に事前に十分な準備と配慮がなければ効果は期待出来ない。

4 学校植樹の体験学習

先に述べたように本校の緑化基本構想に従って開校した4月から植樹を開始した。しかし本校

の基本方針は，子どもと教師の手づくりの学校をめざすことにしたので，父母の労力や金銭の援助を遠慮したため樹木の購入費の援助はない。そこで市教育委員会施設係の配慮で栃木県緑化推進協会からほとんどの樹木を無償で配布していただいた。以下３年間に及ぶ本校の教職員と，子どもたちによる"お手植えの木"の活動について述べることにする。

(1) 植樹した種類と本数

ア．第１年次

サクラ	１６本	カルミヤ	８４本	ニオイヒバ	２３本	ドウダン	１５０本
サワラ	７本	シラカシ	２０本	サツキ	２００本	夏ツバキ	１６本
ヒイラギ	３０本	ナナカマド	２８本	ムラサキシキブ	２８本		

イ．第２年次

ドウダン	５０本	ツツジ	４００本	ヤマザクラ	１０本	トウカエデ	１０本
アジサイ	２００本	キョウチクトウ	４本				

ウ．特別寄付と市緑化協会（成木のため植樹は業者に委託）

サザンカ	１７本	キンモクセイ	１７本	キンヒバ	１７本	トチノキ	２０本
ケヤキ	２本	カイヅカイブキ	１２本				

(2) 子どもと教師でする整地

石をはこぶ子ども

本校の校庭は以前は足利市の廃き物の捨て場になっていた。従って家庭の燃えないごみが数千トンとも，数万トンともいわれる程埋められていた。校庭の周囲を堀ると無数の廃き物や，石が出て来る。

植樹をするためにこれらのものを堀りおこす作業が必要であった。開校した４月と５月の２ケ月かかってその作業をした。全校の子どもに参加させ，全く子どもの力で進められた。「大橋の時間」で4,5,6年生が，清掃の時間1,2年生が，あきかん（自作４５０個）を持って拾い集め，見る見るがれきの山が校庭の隅にあちこちできてしまった。子どもの力はすばらしいもので，２トン積みの車になんと３台分にも及んだ。

市街地に育つ子どもは，働くことを敬遠するという批判を聞いていたが，そのようなことはない。むしろ子どもたちのよく働く姿に感激するほどであった。

(3)　子どもと教師でする植樹

本校は新教育課程実施（昭和５５年４月）の年に開校する予定であったので，校舎建築設計の段階で，勤労体験学習ができるような面積の学校園，学級園を造成していただいた。

開校後の４月２５日に栃木県緑化推進協会より先にあげた，ヤマザクラやサツキ，ドウダンツツジなど１２種類約７００本の花木を無償で配布していただくことができた。トラックから降ろされたあまりにも多い樹木に驚いたり，よろこんだり，しばらく手の出しようがなかった。

植樹する子どもたち

このままにして置くわけにはいかない。午後３時すぎから５年６年生１７８名と教職員２９名で，穴を堀る，水を運ぶ，植えるなど，さながら戦場を思わせるような作業風景が展開された。

子どもたちは，ドウダンツツジやサツキが丁度手ごろなので１人２本，３本と先を競って植えてくれた。子ども一人ひとりの真剣なまなざし，幼稚な手さばきのうちにも，真心を込めて植えてくれた。

教職員は全員子どもたちの先頭に立って，かいがいしく自ら植えたり，子どもたちに手伝ってやっている。そして子どもたちでは出来ない成木を植えた。子どもも，教職員も土と汗と水で衣服が染まっていくのも忘れるほどであった。悪戦苦闘約４時間にして樹木の山は殆んどなくなってしまった。

私たちは，開校してわずか２ヶ月間に，子どもと教職員による整地や植樹活動の体験を通して，「みんなで創る大橋小」の基本構想は，長期にわたって着実に実践されていけば必ず達成できるという見通しがついた。

第２年次（昭和５６年度）の４月には栃木県緑化推進協会より山ツツジやアジサイなど５種類，約６５０本の無償配布をいただいた。この年には「大橋小，子どもと教師が共に学ぶ四活動」が編成されて，校務分掌にもこの四活動を推進するプロジェクトチームが編成された。したがって，学校緑化にかかわる勤労体験学習の企画，運営も「よく働く子を育てる」プロジェクトチームによってできるようになった。

その間に本校教職員の開校記念樹ケヤキ，ＰＴＡによるカイヅカイブキ，篤行者によるサザンカ，モクセイ，市教委よりトチノ木など約８０本の成木を植樹することができた。この植樹は子どもや教職員では無理なので，専門の造園業者に依頼した。

開校して３年を経過した。植樹した木がほとんど根付いて，よく成長している。子どもたちは汗と土にまみれて植えた体験が身に付いているために，１本も樹木を折ったり，傷を付けたりするようすも見られなかった。ましてや，踏みにじるようなことは全くなかった。

(4) 緑化の管理は植樹の工夫から

学校の緑化は子どもを主体にした計画から始まる。日本式庭園もよし，洋風の芝生もよし，それぞれの学校の教育環境の考え方によって整備される。要は子どもの学校生活に潤いをもたせること，学習活動の誘因としての教材性などを考えて実施することが大切である。特に留意しなければならないことは，緑化の視点をあやまると大人のための庭園になってしまったり，子どもたちの自由な遊びや運動の場を制限することになる。

本校ではこの点を特に配慮することにした。具体的には本校の学校園，学級園には地上１０cm程度の縁石だけで，よく見られる鉄などの柵はない。子どもたちが，チョウを追い，蜜蜂をさがしまわったり，自由に観察，世話ができるようにできるだけ子どもに開放した設計である。

また植樹の場合もできるだけ密植方式を採用している。学級園のサツキなどの低木については数十本を密植している。校庭のコーナーなどは特にその点を配慮して植樹している。この方式でいけば，ボールを拾うためにいきなり飛び込んだりすることはない。むしろ植え込みに入ることをためらい，ていねいに花木をかき分けて拾うようになる。

5 四季の草花を育てる勤労体験学習の実際

本校の子どもは，新設校にたまたま巡り合ったために学校植樹の体験学習をさせられた。教職員も同様である。これから述べようとする勤労体験学習は，単なる学校緑化とか，美化のためにする学校自由裁量のものであったり，担任の任意自発のものだけではない。むしろ新教育課程の内容のひとつでもある。どこの学校でも全教育活動の中に組み入れておかなければならないひとつである。勤労体験学習はいろいろの内容，方法があるがどこの学校でも草花つくりなどを取り入れているようである。

本校ではあくまでも新教育課程に則って「四季の草花を育てる」活動を中心にした勤労体験学習を実施して来た，特に学年の発達段階と内容にマッチした簡単な学習の体系を作ることに努力した。

(1) 四季の草花を育てる勤労体験学習の条件整備

最近市内各小学校とも，四季おりおりの花が咲き競い実に美しい。その背景には条件整備の面をはじめ，管理，運営面においてかなりの研究と努力が払われているようである。本校でも子どもがする勤労体験学習をめざして条件の整備に努めている。特に四季おりおりの草花を育てるテーマに中心をおいているため，条件の整備はかなり困難がともなう。用地や用具等についての条件整備については前述したので，ここでは実際に工夫した事例をあげて述べることにする。

ア．用地は学校園，学級園（教材園），ミニ農園

本校の基本構想を具現するために三つの用地を考えた。学校園（学校花壇）は，四季おりおりの草花を咲かせるための調和と統一性を保つための管理，運営を考えた。

学級園（学級花壇）は，草花を咲かせるためと，教科学習と関連のある教材園的な性格を含

めたものである。

ミニ農園は主として中・高学年の教材園としての性格と，さらに勤労生産学習の活動の場として活用するようにした。

イ．一石二鳥の土壌（肥料）つくり

草花づくりの基本は土壌つくりからはじまる。わかっているがこの仕事が学校では一番むずかしい。本校では毎月一回総合グランド周辺のクリーン活動を実施している。その中の1回を落ち葉集めにしている。その方法は，全児童６００名がデパートのさげ袋を家庭から持参して落ち葉を拾い集める。それを校庭の片隅に積んで肥料をつくる。ちょっと工夫すればどの学校でも，子どもたちの体験学習によって土壌つくりはできる。

ウ．子どもで育てられる種類の選定と適用性

○　教材園としての視点

▲印　種まき，苗植え込み
●印　開花の期間（実のり）

大橋小栽培ごよみ

学年	種類＼月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
1	アサガオ		▲		▲●		●						
1	球根	●	●					▲	▲				
2	ヒマワリ		▲	▲	●		●						
2	アブラナ	●	●			▲	▲						
2	球根	●	●					▲	▲				
3	ヘチマ		▲	▲		●		●					
3	ジャガイモ	▲		●	●								▲
4	ジャガイモ	▲		●	●								▲
5	サツマイモ			▲			●		●				
6	ホウセンカ	▲	▲		●			●					
特	ジャガイモ	▲		●	●								▲
殊	サツマイモ		▲	▲			●		●				
5	イネ		▲	▲				●	●				

1年生の理科の指導内容に「植物の種子を蒔いたり，球根を植えたりして育てさせながら，植物が育つには水が必要なこと及び植物が育つときの著しい変化に気付かせる」とある。

本校では1年をはじめ各学年の内容が十分達成できるように用地（教材園），土壌など学校全体として条件の整備に努力している。市街地の家庭では草花の種子を蒔く余裕もない。どうしてもこのような条件を整備しておく必要がある。本校に学ぶ子どもは6年間，自分の手で種子を蒔いたり，球根を植えたりして，植物を育てたりしながら，土に親しんだり，植物を育てる楽しさ

を味わうことができる。

○　学校美化（教材園の発展）の視点

▲　種まき，苗植え
●　開花の時期（実り）

大橋小花ごよみ

種類＼月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
キンセンカ	●	●				▲	▲					
ヤグルマソウ		●	●			▲	▲					
パンジー	●	●				▲	▲					
デージー	●	●										
ブリムラ	●	●					▲	▲				
アイリス		●	●				▲	▲				
カンナ	▲	▲		●			●					
マリーゴールド	▲		▲	●				●				
サルビア	▲		▲	●				●				
キク	▲	▲				●		●				
葉ゲイトウ	▲		▲			●		●				
コスモス		▲	▲			●		●				
ハボタン				▲	▲			●				●
寒咲きナノハナ					▲	▲				●		●
ベコニヤ			▲	▲	●				●			
コリュース	▲		▲	●					●			
ダリヤ	▲	▲		●				●				

本校では，教材園と，その発展及び学校美化の二つの視点に立って草花の種類を選んでいる。また，「四季おりおりの花の咲く学校」が本校の勤労体験学習の基本構想にある。その実現を期するために，種子についても，この表にあるように年間の見とおしを立てて整備するようにしている。

なお新設校であるため，予算も制限があること。また教材園という視点から考えて，市販の苗は一切購入はしないで，子どもたちに，種子を蒔く段階から体験学習を進めることにしている。

○　ものぐさ者で咲く種類を選ぶ

学校の美化は，物ぐさ者でも育てられる草花の種類をいくつか選んでおく必要がある。雨に強い，日照りに強いそして長期間にわたって咲く花があってよい。例えばカンナ，サルビヤ，ベコニヤ，マリーゴールド，コリュースなどがある。これらの種類は子どもたちにも育て易く，また密植ができるので，１本や２本子どもが，いたずらしても，管理のために教師が怒らずにすむ。

子どもの多少の失敗や，いたずらで指導する教師がいつも注意したり，管理の面にばかり注意が向けられていては，勤労体験学習のねらいを達成することはできない。

以上条件整備の概略を述べたが，これらの事項について本校では「よく働く子を育てる」プロジェクトチームが立案して，実践は全校教職員であたるようにしている。

(2) 四季おりおりの草花を咲かせる工夫

「大橋小はいつでも美しい花が咲いている」といわれるためには，教材園としての性格と，学校美化という性格の両面から調和をはからなければならない。また子どもたちに勤労体験学習として管理，運営させる範囲をどこまでにするか，教職員が子どもたちにできない範囲をどこまでするか，その調整を考えなければならない。本校ではこれらの課題を解決するために，いろいろな工夫をしている。

ア．四季おりおりの花は3つの花壇が必要

○ ミニ花だん（第1花壇）

これは本校でつけた名称である。特別に変わったものでなく，魚の入った木製の空き箱と発泡スチロールの箱である。この箱を苗を育てるために利用している。経費はかからない。移動は自在，用地は最少限ですむ。学級単位で子どもたちがグループで種を蒔く，水をくれるなどの作業も自由にできて効率的である。

このミニ花だんがあると，学級園や学校園で春咲きの花が咲いている場合に，すでに夏咲秋咲きの苗が育てられる。

○ 学級園，学校園（第2花壇）

これは学級園として，学校園としての教材園的性格と，学校美化としての性格の両面の機能をもたせるために1年中繰り返し活用する場所である。ひとつの種類の花や実の観察が終わると次は直ちにミニ花壇で育てた苗を植えるようにしている。この方式でいけば四季おりおりの花をいつも咲かせることができる。

第2花壇は本校の子どもと教師での勤労体験学習の象徴であり，また本校の顔でもある。

○ ミニ農園（第3花壇）

本校では第1，第2花壇の方式で四季おりおりの花を咲かせる工夫をしているが，さらに高学年の生産学習にまで発展させるために第3の花壇を設けている。

これがミニ農園である。ここでは4年のジャガイモ，5年のいね，サツマイモ，6年の落花生の栽培などをさせている。そのほか葉ボタンの苗

学級花だん

を移植して育てたり，冬期のうさぎの飼料が不足するのであぶらなを栽培している。

イ．限られた面積を多角的利用

集約農業と同じように学級園や学校園も限られた面積を多角的に利用することが必要である。本校が3つの花壇方式をとっているのはそのためである。割り当てられた一つだけの教材園や学級園ではある種類の草花が咲き終って，次の種類を蒔いたり植えたりするまでに，どうしても間げきができてしまい雑草がはびこってしまう。このような状態では折角の花壇も有効に利用されない場合が多い。本校ではできるだけ間げきを少なくして限られた面積を最大限に利用するように努力している。下記の図がその例である。

	植え付け	開花期間	初春～初夏に咲く花壇
学校統一	10月～11月	1月～4月	カンザキナノハナ
	10月～11月	12月～4月	ハボタン
学級・学年選択	10月～11月	5月～6月	ヤグルマソウ
	10月～11月	5月～6月	アイリス
	10月～11月	3月～4月	スイセン
	10月～11月	3月～5月	チューリップ
	10月～12月	3月～5月	プリムラ

	植え付け	開花期間	夏～秋に咲く花壇
学校統一	3月～ 4月	7月～11月	カンナ
	5月～ 6月	8月～10月	ハゲイトウ
学級・学年選択	5月～ 6月	7月～11月	サルビア
	4月～ 5月	9月～11月	キク
	5月～ 6月	6月～11月	マリーゴールド

第2花壇を学校統一の種類と，学級・学年の種類に分けている。学校統一はできるだけ開花期の長い種類を植える。学級・学年はこの図のような種類を原則とし，そのほか教材園としての草花を自由に選択できるようにする。夏から秋のカンナやハゲイトウが咲き終わると，すぐにハボタンやカンザキナノハナが植えられる。ミニ花壇で苗が育てられるとこのようにできる。

特に大切なことは適期に植えなければならない。夏から秋に開花する草花は，梅雨期前に植えることである。梅雨期の高温多湿の期間に肥料を十分与えて早く成長させることがよい。なお前にも述べておいたが本校ではできるだけ密植することにしている。

緑の機動隊

ウ．勤労体験学習の参加方法

教材園としての草花の場合はクラス全員の参加で作業させることが必要であるが，だからと言っていつも全員主義でやろうとすると時間に制限されて，なかなかできない。

本校では学級園の世話はクラスをいくつかのグループに分けて，耕やす，苗を植える，除草をする，肥料を与えるなど小人数の子どもと教師で放課後１０分間から３０分ぐらいでやるようにしている。小人数の子どもたちと教師で作業する過程で，いろいろな会話をとおして，子どもと教師との人間関係を緊密する場としている。児童指導の効果はこのような場にもあると考えている。

エ．緑の機動隊の活躍

○　編成の目的……草花は適時性が最も大切である。しかし現実には学級担任は授業の確保だけでも大変である。体験学習にばかり参加させてはいられない。そこで学級担任以外の校長，教頭，教務主任の直属のグループを編成して，いつでも招集ができて，いつでも作業に参加できるようにしている。選抜方法は各クラスの希望者２名総員２０名である。条件としてはクラスであまり目立たない子どもや，元気がよすぎる子ども，注意力の持続が乏しい子どもなど児童指導の面を考慮に入れている。この子どもたちと校長，教頭，教務主任との同行によって少しでも子どもたちの変容がみられればと期待している。

○　仕事の内容……ミニ花壇の種蒔き，毎朝の水くれをして苗を育て，それを自分のクラスに持ち返って，クラス全員で第２花壇に植える。担任はこの子たちの仕事を賞さんして認めてやる。また昼休みや放課後に招集があった時，すぐ集って校長や教頭，教務主任と作業をするようになっている。

この緑の機動隊があると，日照りでどうしても水を与えなければならない時などは，昼休みの時間を２０分使うと十分水が与えられる。また学校園の花木に化学肥料など与える時も放課後２０分間あれば十分にできる。そのほかこの子たちには自主性，持続性，注意力を培うために，ベコニヤの一鉢栽培をさせている。一鉢栽培がよく出来た時点で家庭に持ち帰え

らせ，家族で，育てるようにしている。

オ．土のあるところはすべて活用する。

学校緑化にしても，教材園にしても私たちは，ブロックで囲んだ花壇がなければ出来ないと思いがちである。本校では土のあるところはどこでも活用しようと考えている。校舎の日影の部分，校庭の隅々は遊休地として眠っている場合が多い。少し研究すれば日影でよく育つ草花もたくさんあるし，荒れた土地でもたくましく育つ草花はある。２年生ではヒマワリをブロックべいのそばで栽培している。また３年生ではヘチマを防球ネットの一部を活用して育てている。教室のベランダ等も活用しているが，できるだけ自然の露地を活用することがよい。

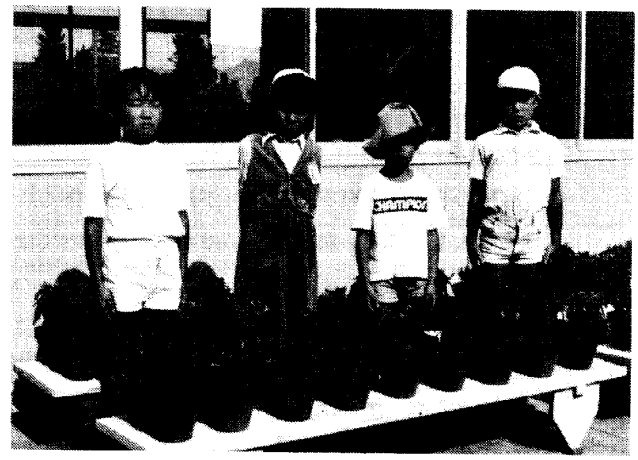
カ．一鉢栽培の落し穴

本校では低学年の子どもたちに草花に親しんだり，育てたり，観察させるために実施している。１年生はアサガオ，２年生はベコニヤ，３年生は五色トウガラシである。いろいろの種類で実施してみたが，低学年としてはこの三つの種類が適切である。それは日照りにも強く成長も早いからである。

一鉢栽培は学者によっては教育的価値はあまりないと言っている。それはあまりに個人本位になりすぎてしまうことである。

たとえば，欠席した友だちの鉢が水不足の場合でも誰も見むきもしないという全く個人本位になってしまうことがある。

勤労体験学習は子どもたちに仕事を通して協調性を養うことが大切である。したがってこの点を指導する教師がどのように配慮していくかを研究しなければならない。



一鉢栽培

５７年度栃木県理科展覧会で本校の１年Ａクラス全員のアサガオの共同研究が最優秀賞に選ばれた。これは一鉢栽培の方法を個人の栽培だけに終ることなく，３４人の共同観察の方法にまで高めた結果である。勤労体験だから子どもにやらせればよい，一鉢栽培をやらせればよいという教師の安易な考えだけでは本来のねらいは達成できない。

よくある話であるが，「子どもは大雨の降った翌朝一生県命になって草花に水を与えている」と。本校の子どもたちにもそのようなことが行なわれる。私たちはこのようすを見て，むしろ頼もしく思っている。よくもここまで子どもたちの習慣と実践力が身について来たものだと。

6　大橋小でできる勤労生産学習

小学校の子どもでできる勤労生産学習は多くの制約がある。先進校の実践例を見ると，いろいろな方法があるが究極は，それぞれの学校の立地条件によって方法を見いだしていかなければならないと思う。一般的に生産学習は，ジャガイモつくり，サツマイモつくり，米づくりなどが多い。これは条件整備の面から，教育課程の内容から，子どもたちの学習活動の点からも最適であるからであると考えられる。ただ米つくりの場合は，どうしても農家の用具や手を借りなければならないために，せっかく始めても1年か2年で中止になることが多い。この学習を推進していくためには最低三つの条件が必要である。第1にはなんといっても用地の確保である。用地は校地内が最適である。第2は指導する教師の技術と関心と実践力である。第3は用具の整備である。

本校の勤労生産学習はこの三つの条件を配慮して大橋小の子どもたちでできる勤労体験学習を3年間かかって体系化してみた。

体系化をはかった理由は，一般に学校の教育活動は特定の教師が在勤している期間は盛んであるがひとたび転出してしまうと，火が消えてしまうようになってしまうことが多い。子どもたちにとってこれほど迷惑なことはない。本校ではこのような弊害を少しでもなくそうと考えた。なお生産学習はジャガイモつくり，サツマイモつくり，米つくりなどであるということにとらわれないで，もっと広義な解釈に立って内容と活動を考えるべきである。

(1)　下学年の生産学習

この学年の生産学習といっても特にないようであるが生産活動を広義に考えればよい。理科の学習内容から取りあげれば，種子の発芽ー成長ー開花ー結実の過程の学習である。アサガオ，ヒマワリなどの種子を適期に収穫することは生産活動のひとつと言えないだろうか。チューリップやスイセンの球根が無数の“子どもを産んでいる”状態を観察させながら掘り取ることは生産学習のひとつとして考えてみたい。子どもたちが，たった一粒の種子から無数の仲間を作り出すようすを見て草花の不思議さに気づいたり，収穫するよろこびを味わうことは生産学習に通ずるものがある。この学年では収穫したこれらの種子や球根を大切に保存して子どもたちの手で3年生から2年生へ，2年生から1年生へと引き継ぐようにしている。

(2)　4年生のジャガイモ栽培

この学年になると仕事の手順が理解できて，働く意欲もかなり旺盛になる。3年の3学期，3月中旬に全員で種いもを植えさせる。2～3人で1畝割り当て自分達の植えた畝は名札を立てて収穫まで忘れないようにして世話をさせるようにしておく。

じゃがいもほり

6月中旬ごろ収穫する。収穫量は毎年約８０キログラムである。この学年だけは自分たちで栽培したものは自分たちで分け合い家庭に持ち帰って家族で試食させる。特に算数のキログラムの単位を実感としてとらえさせる学習のために，１人１キログラムずつ計量器で正確に計らせてから持ち帰らせている。子どもたちが楽しそうにして計量しているようすを，下学年の子どもが，羨やましそうに見ている。本校ではこれをお預けの教育と呼んでいる。私たちも早く4年生になって，じゃがいもを栽培してみたいという期待感と夢を持たせるようにしている。4年生の満足そうな顔はなんともいえない。

じゃがいもの料理　　4 年 ○ 組

3年生のときに，じゃがいもをうえました。4年生になって，じゃがいも畑に行って，草とりや土よせをしました。夏休み前になって，じゃがいもを堀りました。みんな楽しそうに堀っていたことを，いま思い出します。学校に持ち帰って，じゃがいもをみんなにくばり，家に持ち帰りました。みんなに，家庭でじゃがいもをどのように料理して食べたか聞いてみました。みそ汁で，ポテトサラダ，いもフライ，肉じゃが，ポテトチップ，カレーライス，それにコロッケ，バターいため，シチュー，やきそばなどの発表がありました。

ひとりひとりが，一生けんめい育てたじゃがいもは，売っているじゃがいもとは，大ちがいで，口の中に入れると，とろけるような味でした。3年生の3学期にうえてから，とっても楽しみにしていたから，よけいにそう思いました。毎日畑までかけてみたかったです。こい緑のじょうぶそうな葉が出たころに，何回か草とりに行きました。何か小っちゃい子をかわいがってあげているような気持ちになりました。自分たちで育てた，とりたてのじゃがいもの味は最高でした。

５６年学校新聞「おおはし」より

(3)　サツマイモで全校感謝祭り

ア．５年生は苗の植え付け

4年生のジャガイモ堀りの終わった6月中旬頃，ただちにその畑に5年生が約５００本のサツマイモの苗を植え付けをする。梅雨期に入っているため好天をみつけるのが大変である。1人で5～6本植える。全部の子どもが生まれて初めて“さつまいものなる木”にびっくりしている。9月下旬ごろまで，日曜日になると草取りをしたり，つる返しをしに来ている。時には全員で世話に行くこともある。

イ．１年生・２年生・特殊クラスでいも堀り

１０月下旬に1年，２年，ひまわりクラスの子どもたち約２００人が，各自ビニール袋と移植ゴテを持ち，一輪車，リヤカーを引いて畑にいく。この子たちも生まれて初めて，“サツマイモのなる木”を見てびっくりしている。初冬の冷たい土の感触を体験しながら夢中になって堀る。冬眠中のカエルをさがし出して，悲鳴をあげる子，ミミズを堀り出して逃げ回わる子，

いもを取り合う子など戦争のようである。子どもたちはサツマイモ堀りを通して，いろいろな学習体験をするものである。これは単なる学習でなく総合学習の場であることを発見した。

ウ．３年，４年のいもあらい。

１年，２年生が堀って来たサツマイモを，３年，４年生が洗う作業をする。

エ．児童会は感謝祭りの準備

きれいに洗ったいもは，３日程室内で乾燥させる。その間児童会の役員は感謝祭の準備にとりかかっている。

いもほり　　１ねん　いしいさなえ

１年せいは，いもほりをしました。さいしょは，ぜんぜんいもはみえなかったけれど，いっしょうけんめい，いもをほっていたら，いもがふたつでてきて，もっとほったら４つでてきたので，うれしくなりました。もっとほったらみみずがでてきて，びっくりしてしまいました。また，ほってみたら，みみずがいっぴきでたとおもったら，じぶんのゆびでした。またほったら，にんじんみたいなかっこうのさつまいもがでてきました。とっても，いもほりは，おもしろかったです。

―５６年感謝祭の作文朗読―

オ．ズバリ当てよう感謝祭

感謝祭は大橋小勤労生産学習の総決算の意義をもたせて計画するようにしている。５年生はサツマイモの苗を植えて世話をした。１年生，２年生，特殊クラスはいも堀り，３年生，４年生はいも洗い。６年生は児童会の役員として感謝祭りの準備など，本校に学ぶ約６００人の子どもたちが全員参加の行事である。それだけに子どもたちは，ひとりひとりが最も具体的で身近な行事として参加でき，祭りの盛りあがりが大きい。

１，２年生のさつまいもほり

○　ズバリ賞と作文朗読

収穫したサツマイモを体育館に山に積んで，何キログラムあるか，６００人の子どもに投票させる。正確な収穫量に近い者に対しては賞状と賞品（さつま２キログラム）を与える。この方法は子どもたちに量的感覚を体験させることをねらいにしている。投票が終了すると，児童会の役員の手で計量器に，ひとかごずつ積まれる。参加している６００人の目が計量器の針に集中する。会場は緊張感と期待感が漂い異様な雰囲気である。最後の計量がすんで集計発表を待つ。「収穫量１４７キログラム」の声と同時に６００人の子どもからどっと歓声

があがった。このあと各学年代表者が勤労体験学習についての作文の朗読をさせる。なおこの感謝祭りは児童会の行事として運営させている。

賞　　状

第1位

○○○○

あなたは本校感謝祭りにおいて「ずばり当てよう」に応募し頭書の成績をおさめました。
ここに記念品を贈りその栄誉をたたえます

昭和57年○月○日

大橋小学校長　岡田行夫

カ．全校試食会

感謝祭り終了後，147キログラムのサツマイモは，近所の製パン工場に委託して焼きいもにしていただく。そして翌日試食会となる。児童1人に配られる量は1～2本であるが，試食している顔に笑みと満足感が漂っていた。

キ．6年生の落花生つくり

落花生は子どもの身近な食品のひとつである。しかし栽培のようすを知っている子どもは極めて少ない。そこで本校では，子どもたちにとって珍しい植物のひとつであることと，栽培が簡単であるために栽培させている。56年度はかなり（昔の量で5升）の収穫があった。

これも全校お正月集会の時に全児童で試食した。児童1人の量はたった10粒ぐらいしか配られないが，みんなでわかち合う心のかてとしての意義がある。

これまでに述べた一連の活動が大橋小でできる勤労生産学習の概要である。このような学習体系によって活動が継続的に行われれば本校に学ぶ子どもは勤労生産に関して，ある程度の体験ができ，子どもなりに勤労観が身について来ると思う。また教師自身子どもたちと共に活動することによって指導技術も向上し，より適切な指導方法が工夫できるようになる。

7　公共施設のクリーン活動

本校は周囲の市民体育館，有楽公園，市民会館，県立図書館，総合グランドなどを学習の場として利用している。そこで本校の清掃活動は校内ばかりでなく，校外の諸施設も考えることになった。

たまたま国民体育大会の会場となった足利市では，全市民のクリーン運動を展開した。その名を借りて，大橋小のクリーン活動とした。この活動のねらいは奉仕の体験と心を培うことである。５５年１０月の国民体育大会の時から始めて３年間，毎月１回全校の子どもを参加させている。１年生，２年生，３年生は校庭，４年生は市民体育館周辺，５年生はグランド周辺，６年生は有楽公園，市民会館周辺としている。毎月１回であるが，継続的に実施することによって実施力が身に付いていくことを期待している。

8　学校評価で確かめる

本校は毎年８月と１２月の２回にわたって学校評価を行っている。それは新設校であるため，ひとつひとつの教育実践を積み重ねて，確かな路線を敷かなければならないからである。次の表は，このテーマに関係した学校評価の例である。

(1)　第１年次の学校評価（開校の年度）

５５．１２．２４実施

大項目	中項目	小項目		評価の観点（尺度）	評定 人数	評定 %
みんなで創る大橋小	責任を重んじ心をこめて働く子（子ども像）	働くよろこびを育てる活動 （学級花だん） （ミニ農園） （感謝祭） （学校緑化）	計画の段階	1. 新設校のため，まだ計画らしいものがない	0	0
				2. 各係の仕事の内容が不明確で，立案することが困難である。	4	19
				3. 内容の面で理解ができず，係がその時々に実施案を示して対応している。	8	38
				4. ３の対応で，ある程度職員の考えやアイデアも計画に組み込まれている。	8	38
					無(1)	
			実施の段階	1. なんだかよく理解しないままに，子どもをかり出し，教師が子どもにやらせている。	0	0
				2. なんとか「勤労・生産」の意味を子どもに理解させるために，参加させているがあまり期待はもてなかった。	4	19
				3. まだ，目的や内容が固まらないが，学級ごと，学年ごと，学校全体として参加させている中で子どもの思い出，感激をする場面もいくつか認められた。	13	62
				4. ３で，さらに内容を明確にしたり，方法を工夫改善していけば，ねらいが達成できる見通しがついた。	3	14
					無(1)	

(2) 第2年次の学校評価

大項目	中項目	小項目		評価の観点（尺度）	評定 人数	評定 %
みんなで創る大橋小	責任を重んじ心をこめて働く子（子ども像）	働くよろこびを育てる活動	計画の段階	1. 学年・学級ばらばらで学校としての統一のある計画がない。	0	0
				2. 1年～3年の教材園等（観察中心），4年～6年ミニ農園（生産中心）の計画は教育課程との関連が不明確であった。	0	0
				3. 教育課程，その発展としての関連が明確で学校全体としてバランスがとれ，実践可能な計画であった。	14	61
				4. 3で，子どもも，教師もよく対応ができて，本校としての独特な教育活動として推進できる計画だ	9	39
			実施の段階	1. 学年・学級として事前の準備が大変で，実施してもほとんど効果がなかった。	0	0
				2. 教育課程の観察面（1～3年）勤労生産面（4～6年）の関連はよいが，授業が欠けるので，あまり効果があがらなかった。	1	4
				3. 教育課程及びその発展として，学年ごとの内容も明確になった。子どもたちの参加も意欲的で充実した活動である。	13	57
				4. 3で感謝祭りを頂点として，年間の行事もバランスがよく，子どもたちは，四季の変化を実感として，とらえることができた。	9	39

9 おわりに

学校緑化を中心にした体験学習について，3年間の実践事項をまとめた。本校ではこのほか，社会科・理科の地域学習，算数では操作的学習に重点をおいて，体験を通して「進んで学ぶ子」を育成しようと努力している。

最近の新聞で，現代っ子の"生活体験欠乏症"と題して「生活体験，自然の体験，文化の体験，ショックの体験」の四分野をあげて，「健やかな人間形成に妨げとなる。」と言う警告を発している。

私たちはこの記事をよんで，子どもたちの家庭教育や学校教育の現状を再考する必要に迫られているような気がした。そればかりでなく，子どもたちを指導している教師自身が「教師体験欠乏症」になっていないかを深く反省している。

その意味において，この実践記録が今後の体験学習に役立てられれば幸いと思っている。

評

この記録は，開校以来3年間にわたる教師と児童が一体となっての学校緑化を中心とした体験学習の貴重な実践報告であります。

特に「よく働く子」を育成する教育活動 ――― 正しい勤労観と実践力の育成 ――― が，勤労体験学習の体系化の中で，児童の発達段階に応じてよく工夫され実践されております。これらはすべて，草創期の緑化基本構想に基づいた望ましい子ども像，望ましい学校像を指向しての着実な歩みであります。

なかでも，勤労体験学習に必要な条件の整備，勤労体験学習の時間の設定，学習の内容，指導事項などをおさえたうえで，子どもたちに四季の変化を実感としてとらえさせるための取り組みをしております。さらに，新設校ということから，確実な路線を歩むために評価の観点をきめて学校評価を実施するなど，これらは各学校の勤労体験学習を推進するうえでのすばらしい示唆を与えてくれるものです。

6年を1サイクルとしての取り組みの中で，この実践例は3年目の中間まとめということでした。ぜひ，この教育活動がさらに押し進められ，今後3年間の実践が再度教育論文集に発表されますことを関係者一同期待しております。